

Living the Lotus 9

Buddhism in Everyday Life

2024
VOL. 228



8月11日、ロサンゼルス「2024年二世週日本祭」のパレードで北米会員が万灯行進
日本からも青年が参加し、こころひとつに広宣流布を誓願



Photos: Richard Kano

Living the Lotus Vol. 228 (September 2024)

【発行】立正佼成会 国際伝道部
〒166-8537
東京都杉並区和田2-7-1 普門メディアセンター3F
Tel: 03-5341-1124 Fax: 03-5341-1224
E-mail: iiving.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp
編集責任者: 赤川 恵一
編集チーフ: 三川 紗知
校閲者: 小坂 和正、菊池 克之
編集スタッフ: 国際伝道部スタッフ

立正佼成会は1938年に庭野日敬開祖、長沼妙佼脇祖によって創立された、法華三部経を所依の經典とする在家仏教教団です。家庭や職場、地域社会の中で釈尊の教えを生かし、平和な世界を築いていきたいと願う人々の集まりです。現在は庭野日鏡会長とともに、私たち会員は仏教徒として布教伝道に励みながら、宗教界をはじめ各界の人々と手をたずさえ、国内外でさまざまな平和活動に取り組んでいます。

Living the Lotus—Buddhism in Everyday Life (法華経を生きる～生活の中の仏教) というタイトルには、日々の生活のなかに法華経の教えを活かして、泥水に咲く美しい蓮の花のように、人生を豊かに、そしてより価値あるものにしていきたいとの願いが込められています。本誌を通じて、世界中の人々に日々の生活のなかで活かす仏教の教えをお伝えします。

心を耕し、仏を掘り起こす

庭野日鑛
立正佼成会会長



バラモンと釈尊の対話

本会が創立六十周年を迎えた年（一九九八年）、私は「躍進」（現「やくしん」／佼成出版社）誌上で次のように述べています。

「私も少年のころ、畑を耕す手伝いをしました。耕された土と、そうでない土とは相違があります。耕さない土は固くて何も受けつけようとしませんが、よく耕した土はやわらかで、水や肥料をいっぱい吸収するのです。同様によく耕された心は柔軟で、執着がなく、どんなことでも素直に吸収していけるのです」——このようにお話しし、一人ひとりが「心田を耕す」ことの大切さをお伝えしたのですが、それは、これまで何度も述べてきたように、「スッタニパータ」に収められた釈尊の逸話と詩偈をもとにしています。

ここで、あらためてその内容をご紹介します。

田を耕す準備をすませ、農作業を手伝う人びとに食物の配給をはじめた大地主のバラモンが、托鉢に来た釈尊を見かけて問います。厳しい口調で「あなたも耕し、種を播いたあとで食を得たらどうか」と。ところが、釈尊はおだやかに「私もまた耕して種を播く」といわれ、なおも疑心を抱くバラモンに、詩をもってこう語りかけられたのです。

信仰が私の播く種であり、鍛練が雨である。
智慧が私の犁であり、恥じることが轆である。

心が縛る縄であり、内省が犁先と突棒である。

身と言葉を慎み、食を節して過食しない。

真実を守ることは私の草刈りである。

柔和は牛の軛を離すことである。

精進は荷を運ぶ牛で、安穩の境地に運んでくれる。

退くことなく進み、そこに至って憂えることがない。

耕作はこのようになされ、不死の実りをもたらす。

この耕作によって、あらゆる苦悩から解き放たれる。

（『心田を耕す』／庭野日鑿・佼成出版社）

この詩偈の背景にあるのは、釈尊ご在世中のインドなどにおける耕作の様子です。かつては日本においても、農具の犁を家畜に引かせて田畑の土を起こす「犁耕」が耕作の中心でした。釈尊は、田畑（心）の土をとらえて掘り起こすその犁を智慧にたとえておられますが、牛馬の引く力が犁に伝わって十分に犁（智慧）が働くには、牛と犁とをつなぐ轅という棒による制御が欠かせません。詩偈にしたがうと「恥じることが轅」ですから、恥じることによって心に内省という犁先が届き、内省を忘れたときには突棒で犁先にこびりついた土を払うなどして、智慧（犁）が十全に働くようにすると、よく心（田畑）が耕されるのです。

仏教のすべてがここにある

釈尊は、いままきに耕作を行なおうとする人びとに対して、たくみな方便を用いてわかりやすく、大地を耕すことと同じくらい心に信仰の種を播いて育て、実りを得ることが大切であるとお説きになったのです。仏教学者の増谷文雄氏は、この詩偈をすばらしい対機説法と讃えたうえで、ここに「仏教の全貌と本質とが、くまもなく、かつ具体的に」語られていると述べています。信仰の種が心の土壌に落ちれば、憂いなく安穩の境地に至って、さらには「あらゆる苦悩から解き放たれる」というのです。しかも、その手だても含めて、安らぎを求めるすべての人の願いが短い詩偈に凝縮されていて、この教説にふれた多くの人が生きる希望や前を向く力を得たであろうことが想像できます。

ただ、一度でも心を耕せば苦悩がなくなるのかといえば、そうではないと私は思うのです。繰り返し心を耕し、そのつど自身の仏性を掘り起こすことが大切で、それが安らぎに直結するのではないか——その意味で、この仏性の自覚についても、いま少し考察を深めてまいりたいと思います。



（『佼成』2024年9月号）

「まず人さま」という菩薩の精神を胸に、 多くの人々に仏さまの教えを伝えていきたい

カンボジア・プノンペン法座 ソル・ソンヘイン

ソンヘインさんはカンボジアにおけるご法の一粒種とお聞きしましたが、立正佼成会にご縁をいただいたのはいつ頃、どのような経緯だったのですか？

2005年に日本の日蓮宗の僧侶が主導した「妙法の行進」が、カンボジア、タイ、スリランカの上座部仏教の僧侶とともにカンボジアの首都プノンペンで行なわれ、参加者総勢約200人が団扇太鼓を叩きながらお題目を唱え、アジアと世界の平和を力強く訴えました。私はその平和行進にボランティアとして参加していたのですが、その時、日蓮宗の僧侶と一緒にカンボジアを訪問し、日本の仏教徒として個人で行進に参加していた梅津礼司さん(元教学委員)と出会い、立正佼成会がどういう団体であるか、どんな教えなのかを初めて知りました。その後、梅津さんは数回にわたってカンボジアを訪れ、佼成会の教えや学林の存在などについても詳しく話してくれました。そうした梅津さんの佼成会の信仰を熱く語る思いや教えの素晴らしさに魅かれていった私は「もっと佼成会の教えを学びたい」という気持ちになり、2010年に学林の海外修養科生(現・蓮澍・海潮音科)として入林することを決意したのです。

立正佼成会のどんなところに最も魅かれたのですか？

ひと言で言えば「まず人さま」という教えに魅かれ、同時に大きな衝撃を受けました。カンボジアは長年にわたって内戦が続いていたので、「まず自分」と自分の身を守り、自分の生活や幸せが優先されてきました。ですから最初、梅津さんから「まず人さま」という教えを聞いた時、「なぜ？」と思ったのです。でも、教えを学ぶうちに「まず人さま」とは「人さまを幸せにしたい」と願い、実践する菩薩としての生き方なんだと理解できるようになりました。例えば、重い荷物を持っている人がいたら、その荷物を持つことを手伝ったり、ドアを開けてあげたり、人さまのために少しでも自分が何か実践させてもらうことが大事なんだと受け止められるようになったのです。

学林生活では、どのようなことが思い出に残っていますか？



ソル・ソンヘインさん

学林でのいちばんの思い出は、トイレの掃除です。トイレ掃除はカンボジアでも経験したことがなかったのですが、今思えば「掃除をさせられた」ではなく、「掃除をさせていただいた」という気持ちになれたことが本当に有り難いですね。当時、担当講師さんからは「掃除は自分の心の埃を取り除く修行ですよ」と教えていただきましたが、そのお言葉通り、掃除を終えたあと、きれいになったトイレをみんなに使ってもらえる喜びと同時に、それまで味わったことのない清々しい気持ちになれたことを覚えています。そうした学林での2年間は、自分を人間的に成長させてくれた貴重な時間だったと今、心から感謝しています。

学林で学んだ中で日ごろ、心に留めている教えはありますか？

私は毎日の生活の中で八正道の教えを大切にしています。八正道は、正見・正思・正語・正行・正命・正精進・正念・正定という八つの真理に合った生き方が示されていま

す。私たちが生活する家庭や学校、職場、地域社会などで人との対立や軋轢は避けられないものです。だからこそ、多くの人々と調和するために八正道の教えを生かし、実践することがとても重要だと思っています。八正道はそれぞれ関連し合っているものですが、私自身は今、家庭では妻に、職場ではマネージャーとして約20人のスタッフに対して、相手の立場に立った優しい言葉、思いやりのある言葉、相手に共感する言葉を使うなど正語の実践を心がけています。

プノンペン法座では現在、どのような活動をしているのですか？

2012年3月に学林を卒林後、私はカンボジアに帰国したのですが、その年の7月にプノンペン法座を設置していただきました。しかし、当時はまだ法座所はなく、私が暮らしていた家で毎月一回ほど会員が集まり、法座を行なう程度でした。その後、当時の南アジア伝道区の島村雅俊教務員さん(現・宇和島教会長)がバンコクから3カ月に一回ほどカンボジアに布教活動に来られ、法座や佼成会の教えの勉強会をしてくださいました。現在も毎月一回、法座を行なう一方、『佼成』の会長先生のご法話の輪読会を開き、その後それぞれが感想を発表し、お互いに日常生活のこと



プノンペンの会員さんとの法座に参加するソンヘインさん(中央右奥)

を分かち合うようにしています。現在、プノンペン法座の会員は68人になりました。

現在、仕事をしながら主任のお役を果たされていますが、日ごろどんな気持ちでお役に取り組んでいるのですか？

2015年に私は主任のお役を頂いたのですが、お役があるお陰で会員さんの手どりに歩くことができ、法座修行で皆さんと仏さまの教えを学び合うこともできるのだと思っています。会員さんとの連絡や情報発信等でSNSは確かに効率がよく、とても便利なツールです。しかし、私としては手どりは自らを高める修行であり、人さまに心を配る菩薩行だと思っていますので、仕事がどんなに忙しくてもできる限りバイクで会員さん宅を訪問するように努めています。そして対面して、「元気になってますか？」「最近、仕事はどうか？」などの近況を聞くように心がけています。主任としてはまだまだ足りないところが多いのですが、主任は仏さまから頂いた尊く、有り難く、喜びのあるお役だと受け止めています。

開祖さま、会長先生のお言葉で心の支えになっているものはありますか？

開祖さまは16歳の時、東京へ向かう夜汽車の中で「六つの誓い」を立てられましたが、その中に「仕事をするときは、人が見ていようとまいと、陰日向なく働くこと」というお



ソンヘインさんとご家族

言葉があります。私たち人間は、つい人が見ていないと忘れなくなるものですが、私はいつもこの開祖さまの「陰日向なく働くこと」というお言葉を心に刻みながら会社で仕事をさせていただいています。

また、いつも会長先生は「精進、精進、死ぬまで精進、生まれ変わったらまた精進」と教えてくださっているように、精進にはこれでいいという限界はないわけですから、今後さらに精進を重ねて、明るく、優しく、あたたかい人間になれるよう自分を成長させていきたいですね。

最後に将来の夢を聞かせてください。

私としては主任のお役や校成会の活動とともに、カンボジアの発展に寄与できるよう「一食を捧げる運動」の推進をはじめ、現在行なっている小学校の子どもたちに学用品を贈呈する教育支援などの社会貢献活動を、今後さらに充実させていきたいと考えています。そして、これからも「まず人さま」という菩薩の精神を胸に、カンボジアの人たちの幸せを願いながら仏さまの教えを多くの人に伝えるために精進していきたいと思っています。



奥さまと一緒に、学用品を贈呈した子どもたちが学ぶ小学校を訪れて



まんが立正佼成会入門

教団の行事

仏教の三大行事

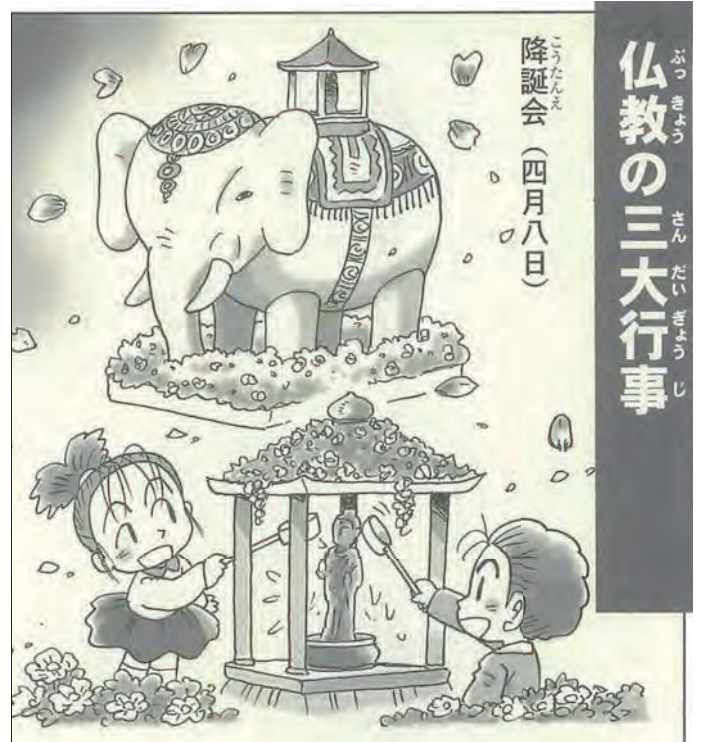
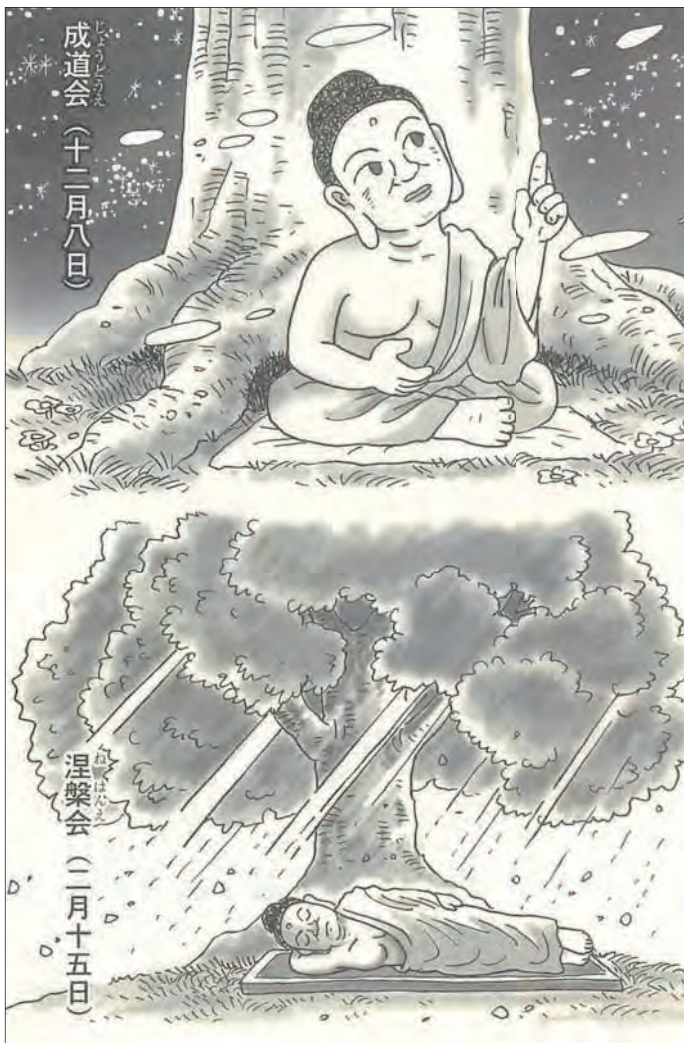
仏教では次の三つを三大行事としています。立正佼成会でも、大聖堂や各教会で式典などを行っています。

四月八日＝降誕会（お釈迦さまの誕生日）

十二月八日＝成道会（お釈迦さまがさとりを開いた日）

二月十五日＝涅槃会（お釈迦さまが亡くなった日）

これらの日は、真理の教えを説いてくださったお釈迦さまに感謝する日です。そして、教えを実践し、多くの人のためにつくしていくことを誓う日でもあるのです。



豆知識

降誕会の中には、お花でかざった「花御堂」の中のお釈迦さまの像に、甘茶をすくってかける。これはお釈迦さまが誕生された瞬間、竜が天から降りてきて香湯をそそいだという伝説にもとづくものだ。



『まんが立正佼成会入門』は、佼成ショップにて好評発売中です。
<https://www.koseishop.com/>

元旦参り

一月一日は、新しい年を迎えたことを喜び、一年の幸せと平和を祈る日です。

立正佼成会でも早朝に式典を開き、大聖堂や教会に参拝し、新年のお祝いをします。

ご本尊さまの前で一年のはじまりを祝うとともに、自分で立てた目標をお誓いします。この誓いを「決定」といいます。

目標に向かって努力することを誓ったり、世界の平和を祈ったりするのは、すがすがしくて気持ちが良いものです。

目標に向かって努力することを誓ったり、世界の平和を祈ったりするのは、すがすがしくて気持ちが良いものです。



● 豆知識

「決定」の意味は、信じきって疑いの心をもたないこと。心に固く決めることで、立正佼成会ではよくつかう言葉だ。元旦参りで「決定」したことは、一年間続けよう。



仏さまとの深い縁

仏との縁を自覚できたら

立正佼成会開祖 庭野日敬



このように、仏さまとの尊い「縁」をかみしめられたら、自然に生き方が変わってくるはずです。

私は雪深い新潟の山村に育ちましたが、子どもころ、雪まみれになって家に帰る

と、祖父が綿入れのなかに私を抱いて、冷え切った体をあたためてくれたものです。その祖父が、いつも口ぐせのようにいていたのは、

「家族のものがただ稼いで、飯を食べていだけなら、鉄砲虫(カミキリムシの幼虫)と同じだ。食うだけのことなら、鉄砲虫でもする。人間と生まれた以上、家族のうちのだれか一人ぐらいは、世の中のお役に立つ人間にならなくちゃならん」

ということでした。この口ぐせが幼い私の脳裏に深くしみこんでいたのか、私は困っている人を見ると黙っていることができず、「何とか手助けしたい」と考えるようになりました。そして、みんなが幸せになれる教えを求めて法華經に出会い、立正佼成会を創立することになったわけです。

いまの人たちは、自己本位で自分の利益しか考えないといわれますが、それは世のため、人のために働く喜びを味わったことがないためでしょう。困っている人の手助けをしたり、悩んでいる人の相談にのってあげたりして、相手に感謝されたときの喜びというのは、ほんとうにうれしいものです。そういう意味では、人さまに喜んでもらえることを実践していくことが、自分が幸せになる早道であるといえるでしょう。

そして、もう一つ心にとめておきたいのは、私たちがふれあう人も、みな、仏さまと前世からの「縁」のある人であるということです。

社会生活のなかでも、よき人間関係を築くためには、相手の人間性を尊重することが大事だといわれますが、それが案外むずかしいのです。そこで「この人は、前世で多くの仏さまを供養し、大願を立てた人だ」というように見ていけば、自然に相手を尊敬できるようになるものです。

もちろん、なかには前世で立てた大願を忘れてしまって、仏さまの道から遠いところにいる人がいるかもしれません。しかし、そういう人には、「仏さまとの縁」を思い出してもらおうように、働きかけていけばいいのです。私が「一人が一人を導く」ことを勧めているのも、そのためです。

こうしてこの世界に「自分も仏、相手も仏」という関係が広がっていけば、この世界がそのまま平和境(常寂光土)となるのです。

みなさんが、このことを心にかみしめて、教えの実践につとめ、仏さまとのお縁をますます深めていかれることを願ってやみません。

釈尊の時代へタイムスリップ

国際伝道部長
赤川 恵一

日本では記録的な猛暑と豪雨に見舞われた夏がようやく過ぎ、暑さはまだ残るものの、暦の上では秋を迎えています。皆さんがお住まいの国や地域はいかがでしょう。

会長先生は今月のご法話で、「スッタニパータ」に収められている釈尊の逸話と詩偈を紹介され、「繰り返し心を耕し、そのつど自身の仏性を掘り起こすことが大切で、それが安らぎに直結する」と教えてくださっています。大地主のバラモンに心を耕すことの大切さを説いたこの詩偈の背景にあるのは、釈尊ご在世中のインドの耕作の様子です。

私は、2010年4月9日から22日まで本会の「第34回仏跡巡礼」のメンバーに加えていただき、インド北東部のビハール州を中心に、釈尊にゆかりの深い地域を巡る旅を体験しました。重要な仏跡の保存を目的に、近代的な開発を免れた地域であるためか、ツアーバスの車窓から見る田園風景は2600年前のインドにタイムスリップしたかのように、釈尊が裸足で遊行されていた様子が偲ばれる刺激的な旅となりました。広大な耕作地の風景を目の当たりにして、「スッタニパータ」に収められた釈尊の巧みな対機説法の様子が、現実味を帯びて私の胸に迫ってまいりました。

インドの旅を振り返りながらご法話を拝読し、心田を耕すことの意味をあらためてかみしめました。今月は「繰り返し心を耕し」、「仏性を掘り起こす」ことを心がけながら、日々を過ごしてまいりたいと思います。



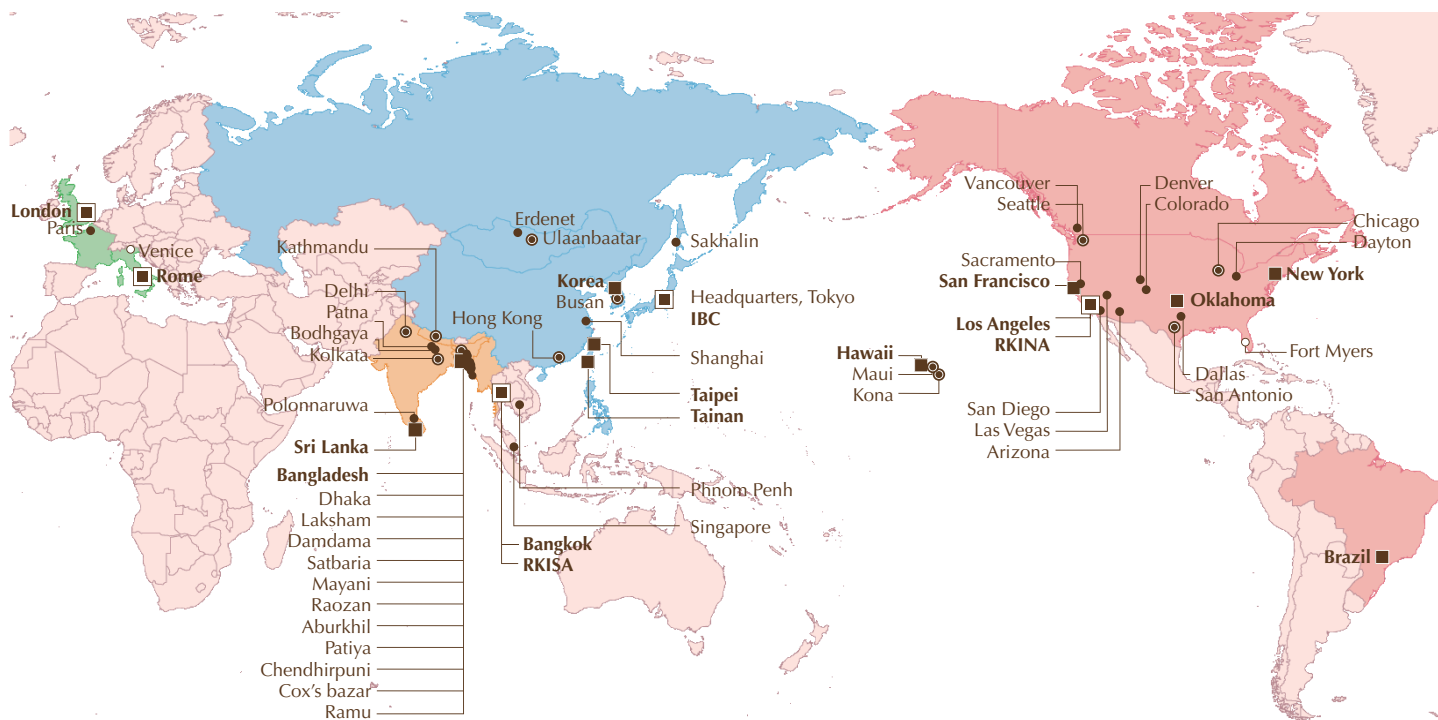
2024年7月14日、韓国教会で行なわれた「教師教育」の後で参加者と（前列中央が赤川部長）

Rissho Kosei-kai International

Make Every Encounter Matter



🌸 A Global Buddhist Movement 🌸



Information about local Dharma centers



facebook



X



✉ We welcome comments on our newsletter *Living the Lotus*: living.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp